就職指導の実態と課題

3年次の前半、約6か月間に指導が集中

高校の就職指導が本格化するのは3年次の4月からで、7月に求人票の閲覧が可能となり、企業・事業所（以下「企業」）の採用試験が解禁となる9月中旬にピークを迎える。生徒一人ひとりの適性や希望に合った企業を見つけ、採用試験に向けた準備・対策をするための指導が極めて短期間に集中することから、就職指導担当の教師の負担が大きいのが実情だ。

社会の様々な事象におけるオンライン化により、面接指導なども、対面方式とオンライン方式の両方を見据えて行う必要も出てきた。臨時休業や学校行事の中止・縮小などが、生徒の進路意識の醸成や自己理解の深化に影響が出ることも念頭に置くべきだろう。そうした高卒就職を取り巻く環境変化を踏まえて、次号から実践事例を交えながら、よりよい就職指導のあり方を考えていく。

就職指導のスケジュール

1・2年次

- 自己理解、進路適性検査
- 社会（地域）の現状を知る
- 職業や職種を理解する

- 就職活動に関する基礎知識を伝える
- 自校の先輩の就職先を知る
- 企業調べ

- マナー講座
- 進路講演会（卒業生、人事担当者）
- インターンシップ、職場見学　など

3年次

	企業の人事担当	高校	
		高校の進路担当	生徒
4月～	●学校訪問開始	●年度初めの進路調査／面談	
5月中旬～下旬	●ハローワーク主催の学卒求人説明会への参加	●マナー講座、面接指導 ●求人票の読み方指導	●希望進路の決定 ●志望理由、自己PRの深堀り
6月1日～	●ハローワークに「求人申込書」を提出	●三者面談	
		●求人情報の収集	●選考にかかわる最後の定期考査
7月1日～	●ハローワークから交付された「確認印」の押された求人票のコピーを学校に届ける（またはウェブ公開する）	●求人票の受け付け ●「高卒就職情報WEB提供サービス」の閲覧・ダウンロード	●求人票の閲覧 ●エントリーを希望する企業を検討
7月中旬まで		●校内選考（7月中旬まで）、応募前職場見学の斡旋	
		●三者面談（校内選考の結果を通知）	
7月中旬～8月中	●応募前職場見学の実施		●応募前職場見学への参加
		●面接、筆記試験、グループディスカッションなど、本番を想定した指導	●志望する企業に提出する履歴書作成
9月5日～	●応募書類の受け付け ←	●応募書類の提出 ←	●履歴書等の書類の完成
9月16日～	●●選考開始（面接・筆記試験・グループディスカッションなど）		
選考後7日以内	●採用可否の決定／合否通知 →	●生徒への合否結果の伝達 →	●採用▶お礼状や入社承諾書などの書類を作成 ●不採用▶2次募集への応募

担当教師が考える［これからの就職指導］

今後の進路指導には、就職指導の前倒しと教師間の役割の分散が必要

井上和也
三重県立桑名北高校

高校の就職指導は、様々な課題に直面しています。多くの高校で就職担当の教師が固定化し、若手教師への指導の知見の伝承が進んでいません。就職指導を不安なく担える教師の絶対数も不足し、求人票の閲覧が始まるまでに、3年生と面談を重ねて志望を掘り下げるのに苦慮しています。特に普通科では、1・2年次は進学希望だった生徒が、3年次になって就職希望に変更し、短期間で企業研究に取り組むこともあります。また、就職の仕方も、学校斡旋就職から縁故就職まで様々で、求められる指導も異なります。

企業の状況も変化しています。大手企業では、採用試験の難度が上がり、大卒者向けのような適性検査や筆記試験を行う企業も見られます。面接も、かつての紋切り型の面接から、答えが1つとは限らない、思考力や発想力を問う面接へ変わってきています。そのため、真面目でおとなしく、とっさの判断が苦手な生徒が不採用になることも珍しくなくなりました。

就職担当者に求められるのは、生徒の志望と適性の把握、企業の求める人物像の明確化、そして両者のマッチングであることは、今後も変わりません。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大を受けた採用環境の変化で、企業へのコンタクトが取りづらくなり、非訪問での職場見学や面接など、ハードルは高くなっています。

適性も希望も価値観も多様な生徒に対する就職指導においては、どのように生きたいのか、どんなふうに働きたいのかについて、生徒に熟考を促すような問いを、1年次の段階から、様々な場面で少しずつ投げかけていくことが、今後さらに重要になるでしょう。

低学年次からの進路意識の醸成は、一見、指導の負担の増大に思えるかもしれませんが、現状は、そういった指導も含め、3年次の前半期に詰め込んでいる状況です。その指導の一部を低学年次に行い、「3年次からの就職指導」が、「低学年次からの中長期のキャリア教育」へと深化すれば、教師も生徒も余裕を持ってじっくり取り組むことができ、自分の夢を実現するために、少々の困難にも立ち向かえる強さを、生徒の中にじっくりと育めるでしょう。

そのためには、3学年の担当教師だけではなく、学年や分掌を超えた多様な教師が就職指導にかかわることが必要です。そして、若手からベテランまで、様々な教師が、社会人の先輩として、働くことの魅力や、人生を幸福なものにする要因についての自分の考えを語ることが大切です。それにより、就職担当の教師の負担が軽減され、働き方改革と指導知見の伝承の両立が図れます。

就職指導の総量は変わらない上に、生徒のアウトプットや教師の指導の質が向上するのであれば、指導の前倒しは有効な手段と言えるでしょう。

いのうえ・かずや
教職歴29年。同校に赴任して7年目。主幹教諭、進路指導部代表。2001年度より22年間にわたり、総合学科、工業科、普通科の高校で進路指導（主として就職指導）を担当。